モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市建設の歴史(3)

―― E・ハワードに先んじたドイツの田園都市構想 ――

副　島　美由紀

1．ドイツ独自の田園都市構想

人が夢見る理想郷のかたちは有史以来数限りなくあるだろうし，ユートピアに関する言述もこれまで無数になされてきた。ユートピアを現実とは縁のない無用のお伽噺と捉える声に対し，ユートピア像の必要性を説く言説も多い。プラトンは『国家』の中で，自分が思い描くような国家は「それを見ようと望む者，そしてそれを見ながら自分自身の内に国家を建設しようと望む者のために」は「おそらく理想的な範型として，天上に捧げられて存在するだろう」と説いたし[1]，「他の時代にもユートピアンたちがいなかったら，人間は裸でみじめったらしく，いまだに洞穴の中で暮らしていることだろう。最初の都会人の血統を引いているのは，他でもないユートピアンたちである……寛大な夢から慈悲深い現実が誕生するのである。ユートピアはあらゆる進歩の本質であるし，よりよき未来への試みである。」と語ったのはアナトール・フランス[2]である。フランスを自著の中で引用したユートピア学者のルイス・マンフォード自身は，現実とユートピアの関係性をさらに強調し，「人々が夢見ている都会や大邸宅は，人々が最終的に生活するところなのである。」とまで言っている[3]。我々は自分達が住む今日の世界が決して理想郷とは言えないことを知っている。であれば，例えば100年前の社会改革者達が提唱し

---

[1] 文献1，p.300.
[2] 文献2，p.18.
[3] 文献2，p.6.

た都市計画の範型を回顧する時，我々はその進歩的で寛大な夢から何らかの改革理念を学び，最終的な生活の場へ至るために歩を進めることができるのだろうか。

ドイツの田園都市建設運動はイギリスにおける田園都市建設に触発されるかたちで約100年前に始まったものである。田園都市の理念を広める媒体となったのは1898年に出版されたエベネザー・ハワードの著書『明日の田園都市』[4]であり，彼の提唱した田園都市の建築プランは世界的な関心を呼び，今日に至るまで常に学問的研究の対象となってきた。しかしハワードの著書出版に先立つ1896年に実はドイツの社会改革者がハワード構想によく似た都市改革プランを起草し，その名も「田園都市」という副題を持つ著作として発表していた事実はドイツ以外の国々では殆ど知られていない。しかしプラトンの言うように各自が抱くユートピア像を自らの内に存在する国家の範型として捉え，またカール・マンハイムに倣ってユートピアの形式とその歴史的・社会的位置の相関関係に着目するならば[5]，ドイツの社会改革者による理想の都市構想はドイツという特有の土壌に生まれた国家の範型としてユートピアの系譜上に固有の位置を占めてもよいはずである。本論はドイツにおける田園都市建設の歴史を回顧する作業の一環として，ハワードに先んじて田園都市モデルを発表していたドイツの社会改革者の仕事を紹介しながら，そのユートピア思想の特徴について考察するものである。

2．社会改革者テオドール・フリッチュと土地改革論

テオドール・フリッチュ（Theodor Fritsch）は1853年ザクセンの農家に生まれた水車技師であった。フリッチュが青年期を迎えた1870年頃から，ドイツでは産業革命による社会の変貌やドイツ帝国の成立を背景に社会改革の風潮が高まっていたが，彼も経済問題や生活改革に強い関心を抱くようにな

[4] 文献3.
[5] 文献4，p.214 f.

る。そして業界紙「ドイツの製粉業」の発行を手がけたことをきっかけに徐々に出版事業に身を投じ，社会改革に関するパンフレットの発行や何冊かの自費出版を行った後，1901年にライプツィヒで「ハンマー出版社(Hammerverlag)」を興す。同年から「ドイツ精神のためのハンマー新聞(Hammer-Blätter für deutschen Sinn)」という定期刊行物の発行が開始される。「ハンマー新聞」はその発行理念として〝生活刷新のための提案〟という性格を前面に打ち出しており，菜食主義，禁酒運動，中流階級と手工業階級の地位の向上運動，土地改革，農業振興といった，当時ドイツで様々に興っていた生活改革運動[6]のプロパガンダを多く紙面に掲げていたという[7]。

水車技師から社会改革者へと変貌を遂げていく過程で，フリッチュは社会的弱者，いわゆる〝持たざる者〟の暮らしを困難にする要因として，土地の私有と大資本に着目するようになる。1894年『二つの根本害悪 ── 土地成金と証券取引』[8]を著して土地改革に関する彼の最初の提案を行うが，1890年代は1840年代に始まったドイツの住宅改革運動が土地改革という根本的な視座を獲得して国内外での植民やジードルング建設運動へと拡大していった時代であった。アメリカの土地改革論者，ヘンリー・ジョージに影響を受けたミヒャエル・フリューアシャイム（Michael Flürscheim，1843-91）らの急進的グループによる「ドイツ土地所有改革同盟（Deutscher Bund für Bodenbesitzreform)」（1888年設立）や，〝土地改革の父〟と呼ばれたアドルフ・ダマシュケによる穏健な「ドイツ土地改革同盟（Bund deutscher Bodenreformer)」（1898年設立）等，この時期に結成された土地改革グループや住宅建築共同組合は数多い[9]。テオドール・ヘルツカが1889年に資本主義と社会主義を折衷した植民の理想郷，「フライラント ― ある社会的な未来像」[10]を発表し，

---

[6] 世紀末の生活改革運動については文献5・6を参照。
[7] 文献7，p.443.
[8] 文献8.
[9] 文献9，p.32 f.
[10] 文献10.

「フライラント」という用語は当時出版業界における流行語のようになったと言われているし[11]，入植の理論家として知られるフランツ・オッペンハイマーも1896年に組合を設立してドイツ的村落共同体の復活を目指すジードルング運動を開始している。

もとより自然法的発想としての土地の公有化論はプラトンの『国家』以来常に存在してきた。19世紀末のドイツの土地改革論者達が共通して訴えたのも土地の公有化，あるいは土地を公共経済的財産として捉える地価の導入である。フリッチュも同様に土地公有化論者であったが，他の理論家達が地価という問題に焦点を絞ったり，ヘルツカのようにアフリカへの植民を想定して共同体経営の理想像を提示したのに対し，フリッチュが行ったのは土地改革を伴う都市建設の提案だった。彼は1895年『未来の都市—田園都市』[12]という本を著し，翌年それを自費出版する。ハワードの田園都市構想が発表される2年前のことである。

3．〝未来都市〟の様相

ドイツにおける土地改革運動の目的はそもそも急激な工業化がもたらした都市の劣悪な住環境の改善であった。ロマン主義的な田園回帰を唱える社会改革者もいたが，フリッチュは社会の産業化や近代化を全面的に否定して文化悲観主義的になるのではなく，ドイツの都市機能そのものが変貌の時期を迎えているという認識に立っていた。中世以来のドイツの都市が防衛ということを目的とし，その目的に適った城壁等の構造を持っていたのに対し，今や開放的な交通網を持った交易および産業都市を建設すべき時であるという考えである。都市はまず中世的構造の制約から解放されねばならない[13]。しかし古い構造に新たな機能を接ぎ木しようとしても不合理および不経済であ

---

[11] 文献11，p.35.
[12] 文献12.
[13] 文献12，p.9.

り，かつ様々な弊害を生む。よって彼が提案したのは単なる住宅改善や都市の再開発ではなく，近代的な構造を持ちほぼ200年先の未来を見越してデザインされるような，新たな都市の建設である。

フリッチュの構想による〝未来都市〟の形状は円形であり，同心円を描く7層の環状ゾーンに分かれている。ゾーニングは建築物の機能ごとに行われ，まず円の中心部は市庁舎や博物館といった公共建築物が占める。そして最も外側には農地等の緑地帯が広がる。これらの環状ゾーンの区分を示すのが図① である。

〔ゾーンの区分〕

1．モニュメンタルな公共建築物
2．公的な性格を持つ建築
3．高級住宅地
4．住宅地あるいは商業用地
5．労働者住宅地あるいは中小企業地域
6．工業・倉庫地帯
7．農業・牧畜・ガーデニング用地

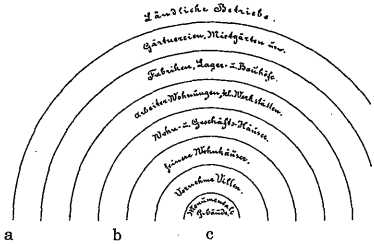


Fig. 1: Zonen-Einteilung.

① 7層のゾーニング：文献12

各ゾーンは環状道路または緑地帯よって分離されており，郊外から中心部へとゾーン縦断鉄道が走っているので中心部は都市のどの部分からもアクセス可能である。農業ゾーンの外側には環状鉄道もあり，鉄道と近隣の河川へと通じる運河とが都市と外界を結ぶ交通手段となっている。

この都市構想の特徴は都市が内側から外側へではなく，外側から内側に向かって成長するよう想定されていることだ。図① で見る半径a－cの線上から都市の建設が始まり，しかもa地点から中心部のc地点に向かって建設が進んでいくことになっている。都市の建設はまず運河あるいは鉄道の建設に適した場所を選んで第6ゾーンから開始される。偏西風を考慮して工場排煙の影響を受けない方向に第5ゾーンを置き，労働者用の住宅地が整備される。

その後一般の住宅や商店街，公共建築ゾーンへと徐々に市街地が発展していくのである。図[2]が示すように，第1ゾーンまでを具えた最初の市街地は楔形の形状である。人口が増加するにつれてそれが扇型に広がり，徐々に半円，そして円形へと発展してくのである。[3]

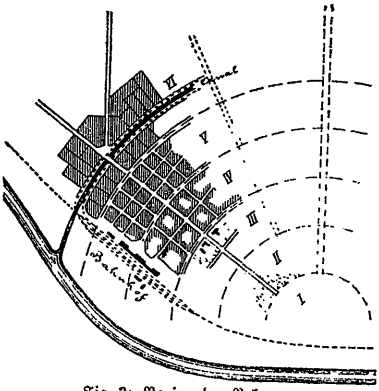


Fig. 3: Beginn der Bebauung.

②都市建設の初期段階：文献 12

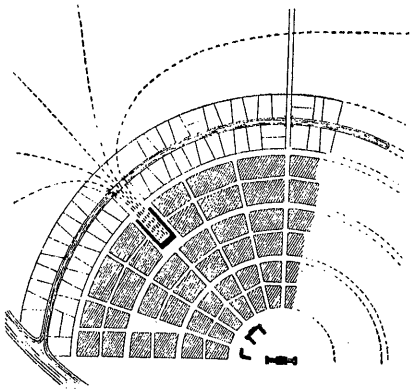


Fig. 6. Drittes Stadium.

③発展段階：文献 12

このような都市建設の過程で最も重要なことは，鉄道，運河，道路の建設，電力，ガス，上下水道の施設が最初から長期的計画によってシステマティックに行われることである。都市建設の際の指針は，美的，効率的，機能的であることであり，[14]効率的な都市構造ととして二重構造を持った道路が紹介されている。つまり地上の道路と平行して地下道を建設し，そこに電気，ガス，水道等の供給網を配置すると同時に物資輸送網としても利用するという案である。[4]

この未来都市の理想的な規模と人口についての言及はないが，都市が半円

[14] 文献 12，p.8.

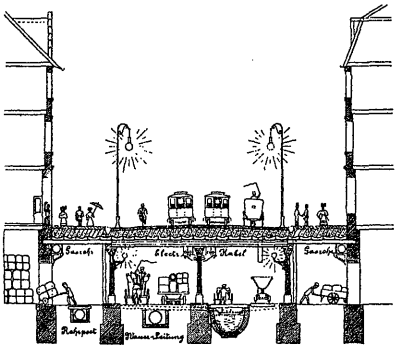


Fig. 8: Straße mit oberer und unterer Fahrbahn.

④二重構造の街路：文献 12

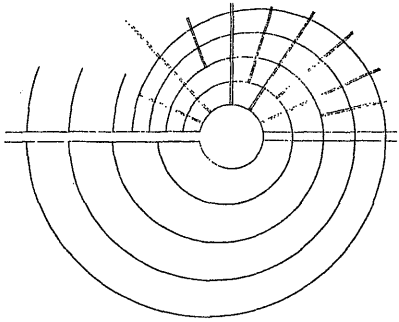
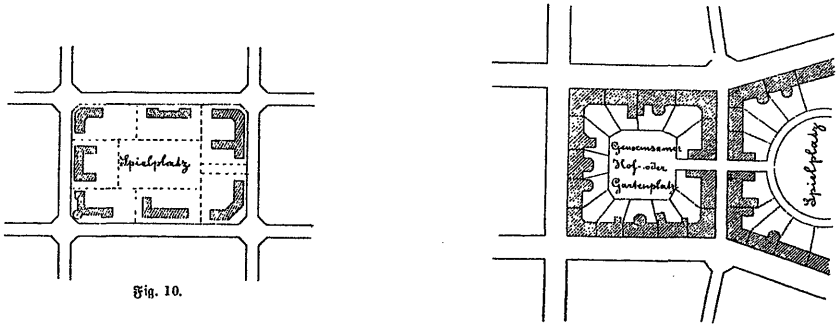


Fig. 2: Spiralförmig sich erweiternde Zonen.

⑤螺旋状に拡大するゾーン：文献 12

形を越えて円形に成長するまでの期間をフリッチュは 150 年から 200 年と想定していることから，ハワードの小規模都市計画とは違って少なくとも中規模以上の都市計画であることが推測される。その際ゾーンの区分と形態は必ずしも厳格に構想通りである必要はなく，ゾーン内の建築物には多様性が許容されるべきであるし，多角形の都市に発展する可能性もある。また都市が半円から円形へと展開していく段階で各ゾーンの幅が人口増加に応じて拡大し，最終的には全体が螺旋を描きながら成長していくだろう[5]，とフリッチュは述べている。

機能性や計画性を重視する一方でフリッチュが強調しているのは都市の有機的な発展ということである。都市は交易と政治の中心であると同時に芸術・文化活動の中心でもあり，円の中央部に設けられたそのための機能と空間を充分に保持しながら発展成長していかなければならない。市役所，美術館，オペラハウス，大学，図書館，聖堂等の建物を配したこの中心部には都市のオアシスとして充分な緑地と公園が必要であり，高級住宅地における家屋は一戸建てであることが理想とされる。住民の健康ということを特に重視する未来の都市では，快適な住空間を保証するために一般の住宅ゾーンでも各ブロックに中庭や遊園地が配置されており[6]，さらに外側の工場ゾーンは



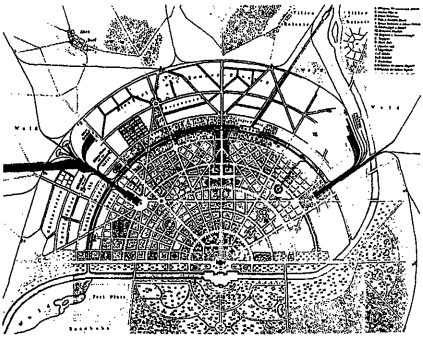
⑥住宅ブロック内の庭と公園：文献12

緑地分離帯によって住宅地と隔てられていなければならない。この住宅を巡る緑地空間の多さによって，フリッチュはこの未来の都市を「田園都市(Gartenstadt)」と呼んでいるのである[15]。

フリッチュの未来都市とハワードの田園都市構想には多くの類似点がある。ハワードが1898年に発表した理想の田園都市もやはり同心円設計であり，街は環状道路によって5層のゾーンに分かれ，その外側を環状鉄道が走っている。市の中心部の公園と公共建築物，住宅地の外側の工場地帯，それを囲む農業地帯等々は，フリッチュの未来都市とよく似た構図を示し，その6分の1を示すダイヤグラム⑨を見ただけでも両者の類似点は顕著である。

また，土地の公有化という点においてもこの二つの構想は共通している。もとより私有財産である土地の高騰こそが住環境悪化の元凶だと考えていたフリッチュは，土地の公有化こそ都市の健全な発展の前提条件であると考えていた。フリッチュによると，土地所有者による個人的利害と私有財産を巡る近視眼的な政策によって，都市はこれまで無秩序・無計画に拡大してきた。土地は自治体から住民への長期貸与というかたちで使用されるべきであり，

[15] 文献12，p.21.



⑦半円段階の田園都市：文献 12

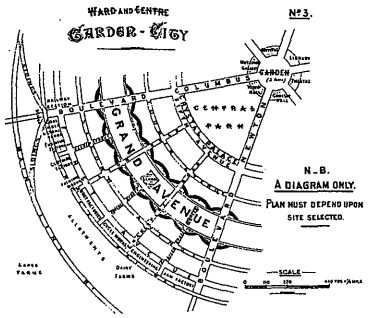


Abb. 11. Garden City Stadtplan. Zur Schule führt die Froebel Street; deutsche Pädagogik zwischen Wissenschaft, Technik und Literatur.

⑧ハワードの田園都市，6／1の図：文献 3

この自治体による土地の管理ということがなければ健全な都市計画は可能とはならない。フリッチュの提案によると，都市はまず土地を所有して場所ごとの地価と使用目的に見合った賃貸料を設定する。賃貸契約は 60, 90, 120 年というスパンで行われ，住民は毎年賃貸料を都市に納入する。地価の漸次的上昇による安定した賃貸料収入により，都市は自治体としての財源を確保することができ，地方税を徴収することなく住民に充実した公共福祉サービスを提供することができる。しかも公的な受託によって建設される住宅は衛生的にも審美的にも優れており，家賃は現在の都市の半分ですむはずである[16]。共同体による土地所有と地代の徴収ということに関してはハワードも同様の提案をしているが，ハワードの田園都市の場合，土地は法的には出資者達による事業法人に属する。この事業法人はインフラストラクチャーを整備すると共に土地建物を所有して住民や企業に賃貸し，家賃収入は自治体の〈中央評議会〉に委託されて公共施設の建設・維持に使われるのである[17]。ハワードの場合，田園都市は半公営という性格を持っているが，自治体による土地の

[16] 文献 12，p.15.
[17] 文献 12，p.13.

管理と貸与という点においてフリッチュの構想とハワードのそれは極めて似通っていると言えよう。

実は土地の公有化という思想は本来ユートピア思想の根幹を成す要件の一つである。プラトンの『国家』以来殆どのユートピア思想が，部分的な私有財産は認めても土地だけは公有化されるべしという思想を貫いてきた。完全な土地公有化が理想だとすれば，ハワード構想における半公営事業はトーマス・スペンスやエドワード・ベラミーといった彼の先駆者達の思想からの後退を意味してはいるが，都市の大きさを人口3万という規模に限定して企業家の協力により土地を確保するという案はフリッチュのリベラルな構想より実行可能性という点において優れており，現に彼の案に賛同する出資者を得たハワードの田園都市構想は1906年にレッチワースの建設という成功例を見た。フリッチュは現存する小規模都市を改造して田園都市建設へと進めることも奨励していたが，彼の著書は殆ど反響を呼ばず，1902年に設立されたドイツ田園都市協会もフリッチュの名には言及してもその構想の内容には全く触れていない[18]。「田園都市の父」[19]として運動に契機を与えたという功績はもっぱらハワードに帰することになった。

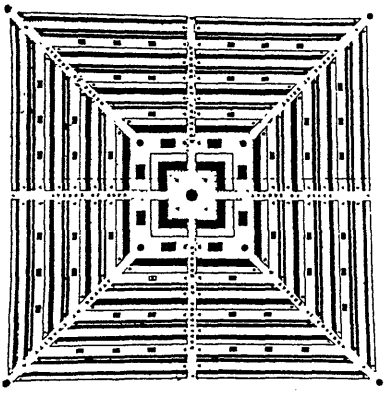
4．理想都市計画の系譜

1898年に世に出たハワードの著作は実際には1893年に書かれ，出版社が見つかるまで5年を要したものである[20]。フリッチュは自分こそ田園都市構想の起草者であるとしてハワードの〝剽窃〟を非難しているが[21]，当時は農村から都市部への急激な人口移動とそれに伴う都市の住環境の悪化が顕著な社会問題となっており，複数の人の頭に同じ解決策が浮かぶのも自然な状況で

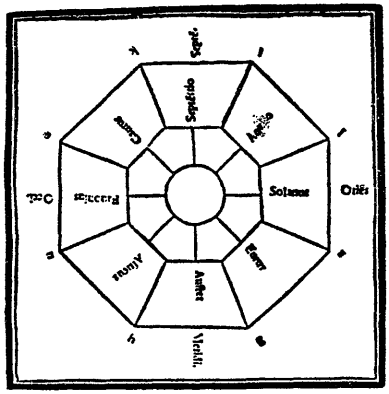
---

[18] 文献13，p.100，文献14，p.3 f.
[19] 文献15，p.32.
[20] 文献16，p.33.
[21] 文献17，p.144.

あった。ハワード自身，エドワード・ギボン・ウェイクフィールド，トーマス・スペンス，ハーバート・スペンサー，ジェイムズ・シルク・バッキンガムらの改革案を挙げ，自らの案をその結合であると呼んでいる[22]。



⑨バッキンガムの理想都市
「ヴィクトリア」(1848)：文献 18



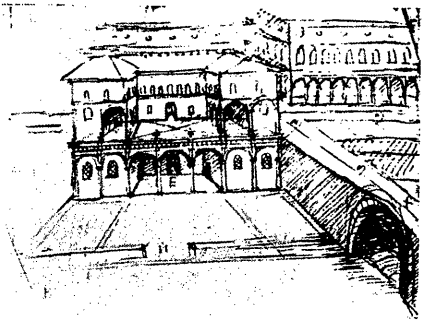
⑩ウィトルウィウスによる理想都市の型（紀元前 1 世紀）：文献 19

そもそも理想都市のデザイン自体，ルネサンス以来の歴史を持っている。『ユートピア』のように文学に記された社会の理想像ではないが，理想都市計画（ユルバニスムス）は都市構築術に主眼を置いたユートピア思想の一形態として独自の系譜を持ち，フリッチュとハワードの田園都市構想はそのような伝統に連なるものである。

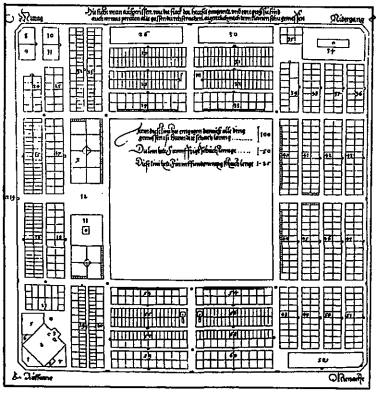
放射状道路を持つ円形構造の都市形態は，ローマの建築家，ウィトルウィウスが紀元前 1 世紀に著した『建築十書』の中に既に記されている[23]。⑩「理想都市」の時代となるルネサンス期には，商工業の重視や火薬と大砲の発明によって従来の都市構造を刷新する必要性が生じていた。実際に建設に至った

---

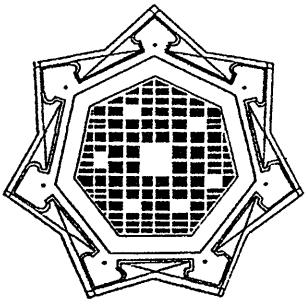
[22] 文献 3，p.103.
[23] 文献 19，p.244.



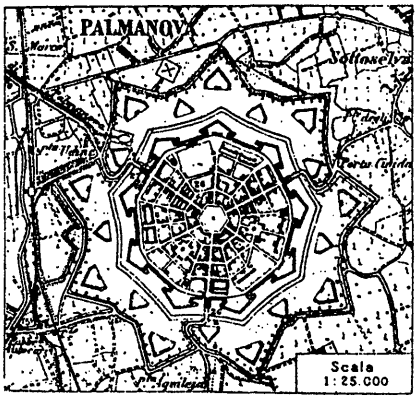
⑪ダ・ヴィンチの理想都市の計画。家と二重構造の街路。(1480〜90頃)文献22



⑫デューラーによる城塞都市のプラン。『城塞，邸宅，村の防備計画に関する講義』(1527) より。：文献20

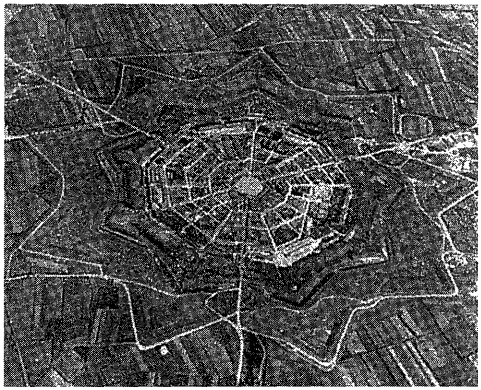


⑬ピエトロ・カタネオの理想都市(1554)：文献22



⑭ヴィチェンツォ・スカモッツィの理想都市 (1615)：文献19

「パルマノヴァ」⑮を初め，建築家はこぞって幾何学的構造の理想都市像を描き⑫⑬⑭，建築論も多く書かれた[24]。レオナルド・ダ・ヴィンチもその都市論の中で，用途によって上道と下道を使い分ける――フリッチュのそれとよく似た――街路の二重構造化を提案している[25]。⑪



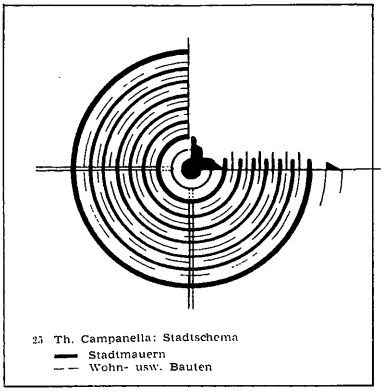
⑮パルマノヴァ(1593)；スカモッツィのプランによりヴェネツィアの北西約100キロに作られた要塞都市。実現された理想都市の数少ない一例：文献19

その後も都市の幾何学的な構築という考えは建築家やユートピアンを魅了し続けた[26]。1606年に反宗教改革による抑圧的空気を厭うかのように書かれたトマソ・カンパネッラ（Tomasso Campanella，1568-1639）の『太陽の都』[27]も7層の環状ゾーンから成る同心円構造を持っており⑯，また1619年にはドイツの宗教家ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ（Johann Valentin Andreae，1586-1654）が，新教徒のためのギルド共産主義的なユートピアである『クリスティアノポリス』[28]⑰を描いている。

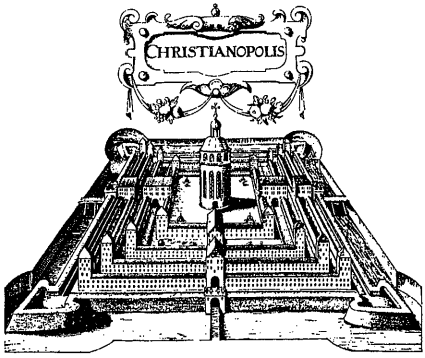
啓蒙思想の影響を受け，防衛的ではなく人間解放的な都市作りを目指したクロード・ニコラス・ルドゥー（Claude Nicolas Ledoux，1736-1806）⑱や，フーリエ主義による理想都市⑲，またバッキンガムにも影響を与えたオーウェンの理想村落⑳やそのアメリカでの実験場となったフロンティア計画

---

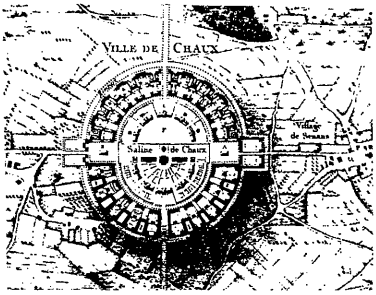
[24] 文献20，p.50.
[25] 文献21，p.272.
[26] 文献27，p.104.
[27] 文献24.
[28] 文献25.



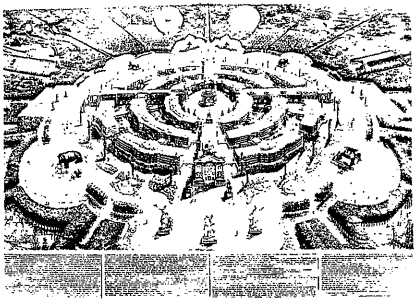
⑯「太陽の都」(1602) から想像されるユートピアの形：文献 27



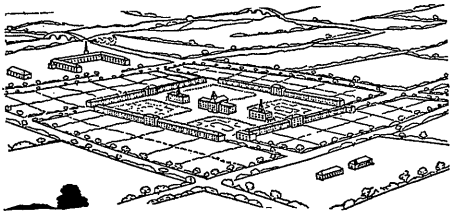
⑰「クリスティアノポリス」(1619)：文献 25



⑱ルドゥーの理想都市，ショー (18世紀末)：文献 27



⑲フーリエ主義者の理想都市(1822)：文献 27

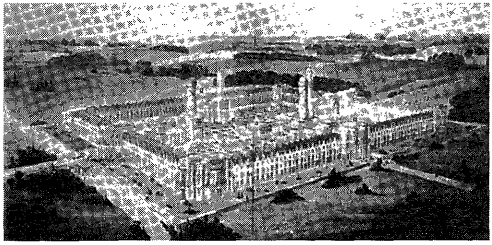


⑳オーウェンの理想村落 (1818)：文献 18

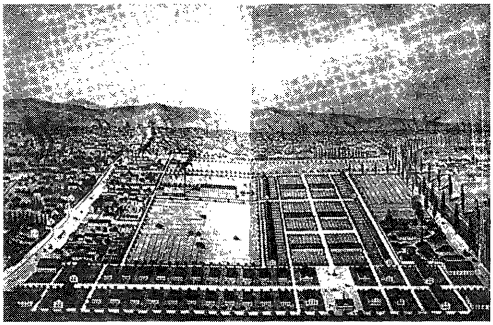
等[21]，理想の共同体のかたちは常に人々の心の中でデザインされてきたし，それらは互いに多くの類似点を見せる。

ドイツではオーウェンとフーリエに触発されたヴィクトール・エ

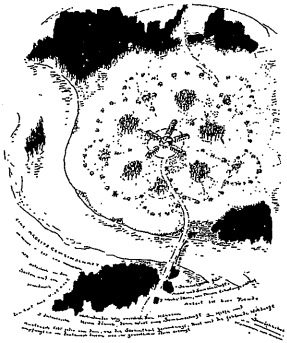
メ・フーバーが1848年に労働者の自主経営管理による住宅地建設を提唱した[29]。㉒有機的な都市というより労働者のための村落だが，ドイツのジードルング構想の先駆けとなった。美的で機能的な住宅地作りという思想はその後も多くの建築家達によって引き継がれ，例えば都市の区画ごとの機能と交通網を考慮したゾーニングはコルビュジエの都市計画㉔にも見ることができる。レッチワース建設によって成功例を見た田園都市理念は世界各国に広まり，田園都市や郊外住宅地型の田園郊外（ガーデン・サバーブ）が建設されたが[30]，㉕㉖ユートピアン達が歴史的にその理想要件の根幹として



㉑オーウェンにより計画されたイリノイ州のニュー・ハーモニー（1824）：文献27



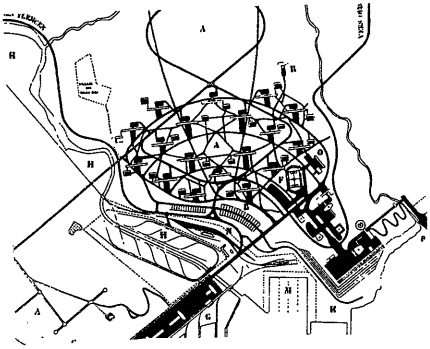
㉒フーバーの労働者コロニー（1848）：文献16



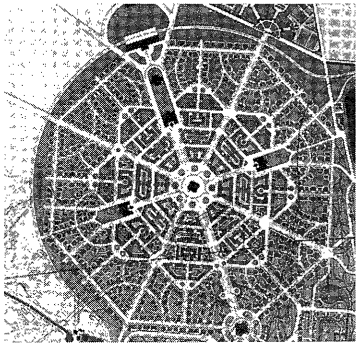
㉓B・タウト『都市の解体』田園における労働共同体集落の図：文献28

29　文献16，p.22.

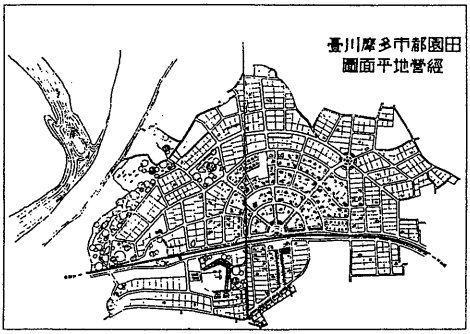
30　日本では1907年に田園都市の理念が紹介されたが，むしろ郊外住宅地として解釈された観がある。文献26，p.174 ff.



㉔コルビュジエによるアルジェリアのヌムール計画（1934）：文献30



㉕ハワードの影響を受けたオランダの田園都市構想（1905）：文献31



㉖東京，田園調布全体計画図（1922）：文献26

きた土地の公有化という思想においては，ハルトマンも指摘する通り[31]本来の田園都市構想は継承されていかなかったと言わざるを得ない。

5．〝未来都市〞と反ユートピア・反ユダヤ主義

従来指摘されている通り，多くのユートピアは自らの内に反ユートピアへ逆転していく要素を孕んでいる[32]。プラトンの『国家』における体制維持的要

31　文献16，p.34.
32　文献32，p.78.

素，モアの『ユートピア』に透けて見える優性思想，19 世紀末のベストセラーとなったベラミーの『顧みれば』[33] における国家統制等々，そこには自由と平等の場として我々が想像するユートピアとは相反する契機が隠されている。フリッチュの「未来の都市」も例外ではなく，それが彼の田園都市構想が当時の社会改革者達によって黙殺された理由であると言われている。

7 つの層にゾーニングされた「未来の都市」は，実ははっきりとした階層秩序を示す。中で最も重要視されている中心部には聖堂や美術館，公的な施設が集められており，その「古典地区」は「聖なる部分」[34] と呼ばれ，特別の地位を占める。また住宅地にも階層があり，「裕福な人々には高級な住環境を提供すべき」[35] だという考えよって準備される高級住宅地はより中央に，また労働者階級の住宅地は周辺に位置している。階層秩序によって裏打ちされたフリッチュの価値基準は，街が螺旋状に発展してゆく段階において「価値の少ないものを外側に追いやりながら有機的に成長する」[36] といった表現に表れている。このことは中央に公園を配して殆ど階層秩序を持たず，住民の協力的精神を基盤とした自治体を目指したハワードの田園都市とは明確な相違を示す。

都市計画が現存する社会秩序の保持を志向する例はルネサンスの理想都市にも見られ[37]，ダ・ヴィンチもその都市論の中で「人民はすべて服従し，その上流階級によって動かされる」[38] と説いている。また 1848 年に発表されたバッキンガムの「ヴィクトリア」構想においても 7 層の同心円ゾーンが社会階層に従って配置され[39]，バッキンガムの理想が同時代の価値を秩序正しいかたちで実現することだったことが窺われる。フリッチュの場合，〝秩序〟の偏重に加えて見受けられるのが民族主義志的志向である。『未来の都市』の中

---

[33] 文献 33.
[34] 文献 12，p.21.
[35] 文献 12，p.10.
[36] 文献 12，p.12 f.
[37] 文献 19，p.244.
[38] 文献 21，p.269.
[39] 文献 20，p.152.

に繰り返し登場する〝秩序〟，〝理性〟，〝美的〟といった言葉は，ひとたび〝ドイツ的〟という言葉が登場しただけでドイツ的な価値観の裏打ちを露呈させる。実は『未来の都市』において明確な民族主義的言表が成されるのは一カ所のみであるが，『未来の都市』出版の翌年に補遺のようなかたちで発行された小冊子『新しい共同体』[40]には，フリッチュの民族主義と優性主義[41]がはっきりと打ち出されている。彼が提案する新しい共同体においては，倫理的・身体的健全さを基準に選ばれた住民達が「自由で曇りのないドイツ精神文化の発展」[42]を目指すのである。ドイツ田園都市協会がフリッチュの提案に殆ど言及せず，はっきりと距離を取ったのは，むしろこのようなイデオロギーに対する警戒からだったと言われている[43]。今日では殆ど忘れられた存在とも言えるフリッチュだが，実は彼は世紀転換期の重要な反ユダヤ主義イデオローグの一人であった。

フリッチュの社会意識が形成された1870年代は，ユダヤ人市民権の確立や株価の暴落，東方ユダヤ人の流入等を背景にして近代反ユダヤ主義の第一波が起こった時期である。トライチュケやチェンバレンといった著名な学者や政治家が反ユダヤ主義を鼓舞するようになり，フリッチュも社会改革と同時に反ユダヤ主義に傾倒していく。1887年に『反ユダヤ主義者の教理問答』を自ら出版して以来，1933年に没するまで約40冊の著作を著しているが，その殆どが『贋神ヤハヴェの証明』[44]や『ユダヤ人の成功の秘密』[45]といった反ユダ

---

40 文献34.

41 優生学的都市構想はイギリスにも存在しており，科学者のフランシス・ガルトン(Sir Francis Galton, 1822-1911)が1910年に発表した「何処か知らず郷(Kantsaywhere)」の構想では，進化論的な意味で優秀な人種が田園都市から生まれると説かれている。(cf. Voigt, Wolffang, Die Gartenstadt als eugenisches Utopia. In: Bollerey, Franziska, Gerhard Fehl, Kristiana Hartmann (Hrsg.) Im Grünen wohnen - im Blauen planen. Hamburg, 1990, p301-314)。

42 文献34, p.7.

43 文献16, p.33.

44 文献36.

45 文献37.

ヤ思想の喧伝書である。中でも『反ユダヤ主義者の教理問答』を改訂した『ユダヤ問題の手引書』[46]は，1919年から44年までの間に49版を重ねるほど多くの読者を得た。これらの著作は歴史的解説やユダヤ教義の紹介といった学問的な粉飾を施してはいるが，基本的に〝ユダヤ人は「人種的変種」，「劣等民族」[47]であって人類全体にとって有害な存在である〟と説く誹謗の書である。また，前述の『二つの根本害悪 —— 土地成金と証券取引』で扱われている財産と土地所有の偏在という問題も，フリッチュのプロパガンダの中では大都市住民に見られる倫理的堕落と共に「ユダヤ禍」と結びつけられ，最終的に「不可視の支配者」であるユダヤ人の影響を排してドイツ民族の没落を防がねばならないという論旨に発展してゆく[48]。これらの害悪から自由な，健全な都市作りの提案として著されたのが『未来の都市』である。

『ユダヤ問題の手引書』が1931年に30版を重ねた時，版元のハンマー社が発行する「ハンマー新聞」にヒトラーが次のような推薦文を寄せている。「私はウィーンにおける青年時代の早い時期に，既にこの本を熟知していた。私はこの本が国家社会主義的反ユダヤ主義の運動を準備するのに特別の貢献を果たしたと確信する者である。(...) この手引がさらに版を重ね，いつか一家に一冊具えられることを望む。」[49]また，同年の「ハンマー新聞」に載った当時のナチ党宣伝部長，グレゴール・シュトラッサーの以下のような発言には，フリッチュの影響力の大きさが窺われる。「これまで2000回にも及ぶ集会を重ねるうち，私はフリッチュによって民族主義思想を学んだという人間に何百となく出会った。彼らは今日我々の国家社会党の地方組織で堅固な基盤を形勢している人物達である。」[50]

---

46 文献38.
47 文献38，p.7.
48 文献39，p.6 f.
49 文献7，p.448.
50 文献7，p.448. 文献40にはヒトラーユーゲントの指導者バルドゥーア・フォン・シーラハに対するフリッチュの影響が言及されている。p.428.

しかしフリッチュのイデオローグとしての活動は著書の出版や新聞の発行によるばかりではなかった。彼の出版社である「ハンマー社」は書物の出版のみならず「ユダヤ人の店で買うな！ (Kauft nicht bei Juden!)」といった反ユダヤ的スローガンを掲げるポスターやフライアーの類が大量に印刷・配布される拠点でもあった。「1890年7月以降，ライプツィヒからは毎日3，4千のフライアーが世に送り出されていた」[51] という記録がある。ハンマー出版社のメディアが発するこれらのプロパガンダが，世紀末からヴァイマール時代にかけて第二波と呼ばれる反ユダヤ主義の高まりを醸成したことは容易に想像される。

そして社会改革者フリッチュのもう一つの側面は，共同体指導者としてのそれである。まずは1907年に「ハンマー新聞」の読者の中から「ドイツ刷新共同体 (Deutsch Erneuerungs-Gemeinde)」が結成され，ベルリン北西に位置するプリグニッツで〝郷里〟を意味する「ハイムラント (Heimland)」という名のジードルング建設が開始される[52]。『未来の都市』および『新しい共同体』における構想を実現する場，そして「地と大地」のイデオロギー発現の場が出来したわけである。1910年代には既にハワードとドイツ田園都市協会の活動により「田園都市」という概念が普及し，田園都市建設活動も始まっていたが，フリッチュによると「彼等の意味するものは，庭を持った一戸建ての高級住宅地といったものにすぎず」，「ハイムライド」のプロジェクトこそが土地改革を伴った理性的土地共同体として有機的な「田園都市」へと発展していくはずであった[53]。「ハイムラント」プロジェクトは最終的には失敗に終わるが，団体としての「ドイツ刷新共同体」は後に秘密結社的な「ゲルマン騎士団 (Germanen Orden)」を下部組織として持つ「帝国ハンマー同盟

---

[51] 文献41，p.70.
[52] フリッチュは『未来の都市』第2版 (1912) の後記中でも「ジードルング協会ハイムランド (Siedlungs-genossecschaft Heimland)」への参加を呼びかけている。
[53] 文献12，p.32.

(Reichshammerbund)」に成長し，ヴァイマール時代に入るとそれぞれが「ドイツ民族攻守同盟」と「トゥーレ協会」に吸収される。「ゲルマン民族主義イデオロギーの信じ難いコングロマリット」[54] とも言われる「ゲルマン騎士団」の機関誌「ルーネン（Runen)」は，この時「フェルキッシャー・ベオーバハター」と名を変え，それが 1920 年にナチ党に買収されてナチ党機関紙となるのである[55]。40 冊以上の著書を世に残したフリッチュの著作家としての活動は実は理想の共同体を設立・運営するための手段に過ぎず，共同体指導者として行使した力こそ彼が反ユダヤ的民族主義の展開に及ぼした最も危険な影響であったと言われている[56]。

フリッチュ自身は「ドイツ民族自由党（Deutschvölkische Freiheitspartei)」[57] の帝国議会議員だったのでナチ党とは直接の関わりを持たなかったが，1933 年にフリッチュの葬儀が名誉国民的な扱いで行われた時，ナチス政府の内相ヴィルヘルム・フリックが「フリッチュの著作は，闘争のための最初にして最善の装備であった」という弔辞を寄せており，ユリウス・シュトライヒャーは「いつかドイツの子供達は，フリッチュがドイツ民族の救済，ひいてはアーリア人種の救済に貢献したと言うだろう。」という賛辞を贈っている[58]。歴史家のR・フェルプスは，フリッチュを「おそらくヒトラー以前の最も重要な反ユダヤ主義者」[59] と呼んでいるが，反ユダヤ主義のイデオローグとして多面的に活躍したシュルツェ＝ナウムブルクやアルフレート・ローゼンベルクと同様に，フリッチュもナチスの文化政策に対して直接・間接的に

---

[54] 文献 41，p.107.
[55] 文献 40，p.63.
[56] 文献 7，p.445.
[57] 1893 年に「反ユダヤ主義ドイツ社会党（Antisemitische Deutsch-Soziale Partei)」として結成されて以来解散と和合を繰り返し，「反ユダヤ主義民族党（Antisemitische Volkspartei)」や「ドイツ社会改革党（Deutsch-Soziale Reformpartei)」を経由している。文献 41，p.68 f.
[58] 文献 7，p.449.
[59] 文献 7，p.443.

様々な影響を与えた人物であることに間違いはないだろう。

6．田園都市構想から国家構想へ

しかしその民族主義的志向にも拘わらず，フリッチュの田園都市構想が従来の理想都市計画を集約するような仕事であったことは否定すべからざる事実であり，その意味においてそれは従来以上の評価に値するものである[60]。またハワードの田園都市構想が自治体経営のための提案であったのに対し，フリッチュのそれは国家構想へと拡大していく射程を明確に持っていたことも考察に値する。フリッチュは田園都市を，国家を形成する共同体のユニットとして考えていた。そのことは『未来の都市』の後半部で彼が都市住民の健康に言及するとき明らかになる。高額な家賃に起因する家屋の狭隘さや居住者数の多さ，それに比例する死亡率や婚外子出生率の高さ，結婚や健全な家庭生活へ至る困難は結果的に国民的・国家的な損失を招く。所有地の売買が禁止されているイギリスの住環境が良好な国家経済の基盤となっているのとは対照的である[61]。住環境の問題は最終的には国家的な問題であるが，国家というものの抽象的な性格故に真に実行可能な国家規模の改革を提案する者は少ない。それは問題の表面のみにとらわれてその根源にある「土地」を見ないからであり，従ってまず都市レベルにおける改善策，つまり田園都市の建設から着手することにより漸次的に国家の理性的な再建への道を歩むべきだ[62]，というのがフリッチュの結論である。

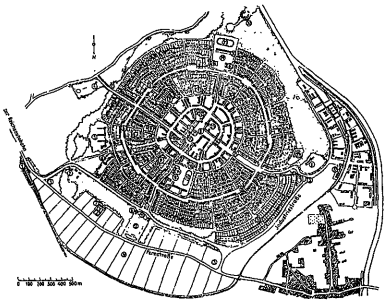
『未来の都市』が書かれた1890年代のドイツでは，急激な都市人口の増加による出生率の低下や疾患の増加，犯罪率の上昇やハンブルクにおけるコレラの流行等が同時に起きていた[63]。「健康」というイデオロギーが形成され始

---

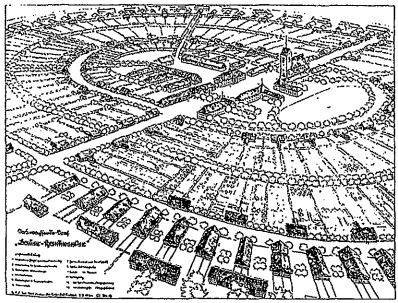
[60] 文献42，p.162.
[61] 文献12，p.28.
[62] 文献12，p.29.
[63] 文献9，p.22 f.

め，健康食品の製造や菜食主義コロニーの建設[64]，また公的な機関による衛生面でのインフラストラクチャーの整備が始まる[65]。「健康問題」は「国家的問題」となりつつあった。フリッチュにとっても共同体経営の目標は，出自の定かならぬ大資本と文化的影響を排して中流階級のみから成る健全で平等な国家を建設することになる。それが彼にとっての「理想的な範型としての国家」であり，プラトンに倣って言うならば，それを見んと欲しまたそれを望む者達にとってはおそらくその国はドイツという精神風土上に存在したのだ。ナチ党は政権掌握翌年の 1934 年，国内の様々な住宅改善運動組織を全て統括して「労働戦線住宅局（Heimstättenamt der Deutschen Arbeitsfront）」を作っている[66]。

フリッチュの田園都市構想を，ユートピアと同様に現実超越的方向性を持つが「真に革命的な機能は持たず現存する存在秩序に有機的に組み込まれるものとして」[67]，あるいは個人の思想の産物ではなくむしろ集団的意識に属す



㉗ナチス時代の都市構想(1935)：文献 29



㉘ナチス時代の理想的村落プラン(1939)：文献 29

[64] 文献 11，43.
[65] 文献 6，p.48.
[66] 文献 44，p.584.
[67] 文献 4，p.202.

るものとして[68]ユートピアではなくイデオロギーの体系に分類することは可能である。しかし何を革命的と呼ぶかは存在現実のどの段階に基準を置くかによって流動することはマンハイムも認める通りであるし[69]，個人的思想であるユートピアもその個人の社会的基盤に基づいているという点においては集団的とも言える[70]，フリッチュの存在超越的思想を真に個性的にしているのは，そのイデオロギー性よりもむしろユートピア思想に特徴的な観念が複合的に表れている点なのである。

マンフォードは『ユートピアの系譜』の中で近世のユートピア像の変遷を記述する際，「田舎の大邸宅」，「石炭の町」，「国家的ユートピア」という3つの主要な観念を挙げている[71]。「田舎の大邸宅」は，人が防衛のために城壁を築くことをやめ，個人的自由を享受しようとして快適な郊外へ住むことを望んだ時代，つまり中世社会の秩序が近代社会のそれに変貌しようとする際に生まれたユートピアのパターンである。「石炭の町」というユートピアは産業時代の産物であり，個人的ユートピアの欠陥を「集合的代表制」という制度で償おうという精神に裏打ちされている。製品の生産と販売を都市活動の中心とし，蓄積された資本の公正な分配という目標を持っていた。「国家的ユートピア」は上記の二つを結び合わせる結合組織であり，「国民国家」の社会神話である。マンフォードによると「石炭の町」と「田園の大邸宅」との和解は，同一社会内の他の集団との共通性を強調するために「他のユートピア国家からの侵略の危険性を常に喧伝することによって」[72]行われる。フリッチュのユートピアは工場の設置を起点に置く産業都市でありながら田園の快適さを保持する田園都市であり，かつそれが最終的には国家構想であるという点においてハワードその他の理想都市構想とは一線を画するものである。マン

---

[68] 文献32，p.31 f.
[69] 文献4，p.207.
[70] 文献4，p.214.
[71] 文献2，p.189 ff.
[72] 文献2，p.214.

フォードは「ユートピア的国家」を「奇跡同然」，「紙上の世界の完成に過ぎぬ」ものとし，上記の和解が「実施される道具立てを一層注意深く調査してみるとしたら，さぞかし興味深いことであろう」と言っているが[73]，フリッチュが提唱した類のユートピアの虚偽性は，実現の段階に至ると興味深いでは済まされなかったことは歴史が示す通りである。ユートピア思想と社会的現存の結び付きを言うならばフリッチュの田園都市構想はドイツ社会に特徴的な現象であったことは言を待たないが，フリッチュの都市ユートピアは上記の3段階のユートピア要素を個体発生的に具有している点において個性的と呼ぶに値するものであり，それは理想社会の探求であるユートピアの系譜上により強く記憶されるべきものであろう。

ドイツ田園都市協会がフリッチュの思想とは距離を取ったとは言え，その後の活動において民族主義思想から全く自由であったわけではないし，ドイツ最初の田園都市であるヘレラウの歴史にも国家社会主義思想は容易に溶け込んでいたのではあるが，それについてはまた稿を改めて論じるつもりである。

【文献表】

1．プラトン『国家』(下)，第九巻，藤沢令夫訳，岩波書店，1979.
2．ルイス・マンフォード『ユートピアの系譜』関裕三郎訳，新泉社，2000.
3．Howard, Ebenezer, Tomorrow: a peaceful path to real reform. London, 1898. (reprint, edited by Richard LeGates and Frederic Stout) London 1998.（1902年に Garden Cities of To-Morrow として再版される。）『明日の田園都市』長素連訳，鹿島出版会，1968.
4．カール・マンハイム『イデオロギーとユートピア』鈴木二郎訳，未来社，1968.
5．副島美由紀「モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市運動の歴

[73] 文献2，p.210.

史—世紀転換期の生活改革運動—」In：「人文研究」第96輯，1998，p 189-214.

6．長谷川章『世紀末の都市と身体』ブリュッケ，2000.

7．Phelps, Reginald H., Theodor Fritsch und der Antisemitismus. In: Deutsche Rundschau, Nr.87, 1961, p442-449.

8．Fritsch, Theodor, Zwei Grundübel: Boden-Wucher und Börse. Leipzig, 1894.

9．Krabbe, Wolfgang R., Gesellschaftsänderung durch Lebensreform. Göttingen, 1974.

10. Hertzka, Theodor, Freiland: ein sociales Zukunftsbild. Dresden, 1889.

11. Baumgartner, Judith, Ernährungsreform—Antwort auf Industrialisierung und Ernährungswandel. Frankfurt a.M., 1992.

12. Fritsch, Theodor, Die Stadt der Zukunft. Leipzig, 1896.

13. Kampffmeyer, Hans, Ebenezer Howard und die englische Gartenstadt-Bewegung. In : Bollerey, Franziska, Gerhard Fehl, Kristiana Hartmann (Hrsg.) Im Grünen wohnen - im Blauen planen. Hamburg, 1990.

14. Kampffmeyer, Hans, Die deutsche Gartenstadtbewegung. In :Die deutsche Gartenstadtbewegung. Berlin, 1911.

15. Krückemeyer, Thomas, Gartenstadt als Reformmodell. Siegen, 1997.

16. Hartmann, Kristiana, Deutsche Gartenstadtbewegung. München, 1976.

17. Bergmann, Klaus, Agrarpolitik und Großstadtfeindlichkeit, Meisenheim, 1970.

18. Lees, Lynn Hollen, Andrew Lees(ed.), The Rise of Urban Britain. New York, 1985.

19. 川添登『都市と文明』雪華社，1965.

20. ヘレン・ロウズナウ『理想都市：その建築的展開』西川幸治監訳，鹿島

出版会，1979.

21. レオナルド・ダ・ヴィンチ『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記（下)』杉浦明平訳，岩波書店，1958.
22. ウルリヒ・コンラーツ／ハンス・G・シュペルリヒ『幻想の建築』藤森健次訳，彰国社，1966.
23. アーサー・コーン『都市形成の歴史』星野芳久訳，鹿島出版会，1968.
24. トマソ・カンパネッラ『太陽の都』近藤恒一訳，岩波書店，1992.
25. Andreae, Johann Valentin, Christianopolis; herausgegeben von Wolfgang Biesterfeld. Stuttgart, 1975
26. 東秀紀『漱石の倫敦，ハワードのロンドン』中央公論社，1991.
27. Bollerey, Franziska, Archtekturkonzeptionen der utopischen Sozialisten. Berlin, 1991.
28. マンフレッド・シュパイデル／セゾン美術館『ブルーノ・タウト 1880－1938』トレヴィル，1994.
29. Kähler, Gert (Hrsg.), Geschichte des Wohnens Bd.4. 1918-1945. Stuttgart, 1996.
30. ノーマ・エヴァンソン『ル・コルビュジエの構想：都市デザインと機械の表徴』酒井孝博訳，井上書院，1984.
31. Bollerey, Franziska, Der holländische Weg: Die Adaption des Gartenstadt in den Niederlanden. In: Bollerey, Franziska, Gerhard Fehl, Kristiana Hartmann (Hrsg.) Im Grünen wohnen - im Blauen planen. Hamburg, 1990, p410-439.
32. 川端香男里『ユートピアの幻想』講談社，1993.
33. エドワード・ベラミー『顧みれば』山本政善訳，岩波文庫，1953.
34. Fritsch, Theodor, Neue Gemeinde. Leipzig, 1897.
35. Voigt, Wolfgang, Die Gartenstadt als eugenisches Utopia. In: Bollerey, Franziska, Gerhard Fehl, Kristiana Hartmann (Hrsg.) Im Grünen wohnen - im Blauen planen. Hamburg, 1990, p301-314.

36. Fritsch, Theodor, Mein Beweis-Material gegen Jahwe. Leipzig, 1911.
37. Fritsch, Theodor, Das Rätsel des jüdischen Erfolges. Leipzig, 1919.
38. Fritsch, Theodor, Handbuch der Judenfrage. Hamburg, 1919.
39. Fritsch, Theodor, Die Sünden der Großfinanz. Leipzig, 1927.
40. 平井正『ドイツ悲劇の誕生〔2〕ダダ／ナチ 1920－1925』せりか書房，1993.
41. Greive, Hermann, Geschichte des modernen Antisemitismus in Deutschland. Darmstadt, 1988.
42. Muthesius, Stefan, Das englische Vorbild. München, 1974.
43. 副島博彦「世紀末エデンの園」In「あもるふ」第3号，東京工業大学ドイツ語教室，1997.p 31-45.
44. Hafner, Thomas, Eigenheim und Kleinsiedlung. In: Kähler, Gert (Hrsg.), Geschichte des Wohnens. Bd. 4. 1918-1945. Stuttgart, 1996.

（その他の参考文献）

・Tarn, John Nelson, Working-class Housing in 19-century Britain, London, 1969.
・伊達功『ユートピア思想と現代』創元社，1971.
・M・L・ベルネリ『ユートピアの思想史』手塚宏一・広川隆一訳，太平出版社，1972.
・高柳俊一『ユートピアと都市』産業能率短大出版部，1975.
・L・ベネヴォロ『近代都市計画の起源』横山正訳，鹿島出版会，1976.
・月尾嘉男・北原理雄『実現されたユートピア』鹿島出版会，1980.
・W・アシュワース『イギリス田園都市の社会史』下總薫監訳，1987.
・ジル・ラプージュ『ユートピアと文明』中村弓子他訳，紀伊国屋書店，1988.
・Schollmeier, Axel, Gartenstädte in Deutschland. Münster, 1988.
・Reulecke, Jürgen (Hrsg.), Geschichte des Wohnens Bd.4. 1918-1945. Stuttgart, 1997.

Eine Utopie der Moderne: Das Phänomen Gartenstadt in Deutschland (3)
—— Der deutsche Schöpfer der Gartenstadtidee

Miyuki SOEJIMA

Die Gartenstadtbewegung um die Jahrhundertwende fungierte in Deutschland als Sammelbecken aller Lebensreformbewegungen wie Boden-, Kultur- und Sozialreformbestrebungen, die als Reaktion auf den durch die industrielle Revolution verursachten Strukturwandel entstanden. Der Gartenstadtgedanke war ein Vorschlag zur "Vermählung von Stadt und Land", um die von dem ständig zunehmenden Bevölkerungsabfluß vom Lande in die Stadt verursachten Mißstände in den Großstädten zu verringern. Es ist der Engländer Ebenezer Howard (1850-1928), der mit seinem Buch *To-morrow: a Peaceful Path to Real Reform* (1898) als der Schöpfer der Gartenstadtidee gilt, aber unbekannt ist die Tatsache, daß in Deutschland das Gartenstadtkonzept unabhängig von dem englischen Reformerkreis schon vorgetragen worden war. Hier hatte der Leipziger Sozialreformer, Theodor Fritsch(1853-1933), bereits 1896 ein Buch mit dem Titel *Die Stadt der Zukunft veröffentlicht*, das sogar mit dem Untertitel *Gartenstadt* versehen war.

Die Modelle der beiden Idealstädte für die Zukunft sind sehr ähnlich. Die kreisförmige Stadt ist in mehrere Ringzonen aufgeteilt. In der Stadt verlaufen Radialstraßen und um die Stadt herum die ebenfalls im Kreis verlaufende Eisenbahnstrecke. Innerhalb der Stadt gibt es Grüngürtel und Parkanlagen, außerhalb der Fabrikzone Grünflächen zur landwirtschaftlichen Nutzung. Auch in Hinsicht auf bodenreformerische Aspekte machten die beiden Reformer ähnliche Vorschläge, wie zum

Beispiel die erste Bedingung, daß Grund und Boden Gemeindeeigentum sein sollten. Es ist nicht verwunderlich, daß Theodor Fritsch den englischen Sozialharmonisten des Plagiats bezichtigte.

Dennoch weisen die beiden Konzepte, trotz aller strukturellen Ähnlichkeiten, einen wesentlichen Unterschied in den Grundgedanken auf: Die Zonierung bei Fritschs Stadtplan geht nach den hierarchischen Sozialständen, indem dem "allerheiligsten" Stadtzentrum mit monumentalen öffentlichen Gebäuden das "vornehme" Villenviertel für reiche Leute folgt, und hinter dem Wohnviertel mit Beamtenhäusern befindet sich das Arbeiterviertel neben der Fabrikzone. Diese Zoneneinteilung beweist das ständisch-autoritäre Denken von Fritsch, während beim Howardschen Konzept das Sehnen nach der egalitären Bürgergemeinschaft deutlich zu spüren ist. Im Gegensatz zu Howards berühmtem Buch fand Fritschs Vorschlag auch in Deutschland kaum Resonanz, sogar die Deutsche Gartenstadt-Gesellschaft distanzierte sich von Fritsch, nicht nur wegen der hierarchischen Ideale, sondern auch wegen seines fanatischen Antisemitismus. Obwohl in *Der Stadt der Zukunft* kein deutlich antisemitisches Wort zu finden ist, propagierte Fritsch extrem antisemitische und eugenische Gedanken in zahlreichen anderen Büchern. Nicht zuletzt wegen seines bekanntesten Buches, *Handbuch der Judenfrage* (1919) und der in seinem eigenen Verlag gedruckten Flugblättern mit dem Slogan wie "Kauf nicht bei Juden!" wird Fritsch von dem Historiker R. Phelps für "den wohl wichtigsten deutschen Antisemiten vor Hitler" gehalten.

Trotz des typisch deutschen völkischen und ordnungsfreudigen Denkens, das Theodor Fritsch charakterisiert, kann jedoch nicht bestritten werden, daß er die meisten Gartenstadtgedanken Howards vorwegnahm. Darüber hinaus ist die Nähe der utopischen Stadtidylle und

des Totalitarismus bei Fritsch denkwürdig genug, weil seine Stadt-Utopie den Aspekt der Entwicklung zum Staat in sich verbarg, was bei der Howardschen Idee fehlte. Fritsch sah seine Gartenstadt als Keimzelle eines neuen staatlichen Lebens. Und nach dem Soziologen Lewis Mumford ist die Staat-Utopie die dritte Phase der modernen Utopie, die zeitlich nach der Landhäuser- und der Industriestadt-Utopie kommen und die beiden ersten kombinieren sollte. Wie unrealistisch diese Kombinationsarbeit ist, betont Mumford allerdings, aber das Denken und Vorschlag Fritschs sollten zumindest besser in Erinnerung bleiben, besonders in unserer Geschichte des ständigen Versuchs um besseres und humaneres Wohnen und Leben.